

令和6年度第1回静岡県産業教育審議会 会議録

日時：令和7年1月22日（水）

午前10時から正午まで

場所：県庁別館9階第2特別会議室

1 教育長あいさつ

- ・委員への御就任御快諾に感謝申し上げます。
- ・本審議会は、産業教育振興法及びそれに基づく静岡県産業教育審議会条例の定めるところにより、産業教育の振興に関する総合計画の樹立、教育の内容やその方法の改善、施設・設備の整備と充実、教員・指導者の養成計画、産業界との協力促進等を通して、産業教育の振興を図ることを目的として設置するものである。
- ・本審議会は、「専門高校等におけるこれからの時代に対応した産業教育の在り方」について審議をお願いするものである。
- ・専門高校等というと、商業、農業、工業、本県においては水産等があるが、「等」という言葉があるように、総合学科等における教育等も含めて、ぜひ御審議いただきたい。
- ・今日、産業界を取り巻く環境は、技術革新の進展により急速に変化をしている。特に、人工知能(AI)やビッグデータ、IoTの導入など、大きな変化の中で、労働市場は流動化し、雇用形態も多様化が進んでいる。このような変化に対応するためには、特定の知識や技能だけでなく、生涯学習の姿勢や新たな価値創造能力が求められる。リスキング等の言葉でも最近では一般にも広まっている概念かと思う。一方、少子化に伴う人口減少が進行する中で、将来の産業界を担う人材の育成が喫緊の課題となっている。本県においては、ここ2、3年、高校の在り方をめぐって、県内全域を視野に入れた基本計画の策定と並んで、旧学区単位で地域協議会を行っている。その地域協議会で、その地域の高校生たちの学びをどう考えていくか、本県産業界の担い手をどう育成するかということが皆様から問題提起されている。
- ・「静岡県立高等学校の在り方に関する基本計画」では、職業系専門学科では、「地域の産業界等と連携したカリキュラムの導入や学科改善等の推進」、また「プロフェッショナル人材の更なる活用」が目指す方向性として示されている。
- ・皆様には、こうしたことを踏まえて、広範多岐にわたる審議内容について御審議をお願いしたい。本年9月に中間まとめを行い、来年2月に答申をいただけるとありがたいと考えている。
- ・高校の在り方の全体像を示した基本計画、そして、現在進行中で各地区で進行している地域協議会、そして、産業教育の在り方について県内全域を貫くこの産業教育審議会。これらがいわば経系、緯系のようになって、静岡県の高校生たちの学びの未来を構築していくということになる。
- ・これからの時代に対応した産業教育について、委員の皆様それぞれの御専門のお立場、視点からの幅広く忌憚のない御意見、御提言をいただきたい。

2 会長・副会長の選任

(互選により、会長は川田善正氏、副会長は岸田裕之氏に決定した。)

3 趣旨説明(中村高校教育課長)

- ・諮問事項は「専門高校等におけるこれからの時代に対応した産業教育の在り方」である。
- ・諮問理由は、社会が急速に変化する中で、職業に必要とされる知識・技術も絶え間なく変化し高度化している。生産年齢人口が減少していくこと、AIやロボットにより働く人の働く内容なども変わっていくような未来が予測されると思われる。また、それに伴って、働く人に求められる能力が、産業界の形態に合わせて変化していくことも考えられる。このような視点で、御議論いただきたい。
- ・本県においても、これらの変化に対応できるデジタル人材やスタートアップ人材、そして地域産業界を担う人材の確保が課題であるという認識に立っている。

・検討の視点を3つほど用意した。

視点の1つ目は、「社会の急激な変化に主体的に対応できる専門的資質・能力の育成」である。AIやロボティクス、技術革新やデジタル化に対応できる人材、次世代の産業を担う人材を育成する必要がある。そのためにも、教員には、最新の知識や技術の習得、地域との連携を深めるコーディネート能力等が求められる。また、実践的な教育を保障するための施設や設備の整備も重要である。

・視点の2つ目は、「県内産業の発展と新産業の創出に貢献できる能力の育成」である。国際競争の激化と空洞化の進行、エネルギー制約等の強まりといったようなものもあり、先行きの不透明感が強くなっている。このような中では、起業家精神と経営感覚を併せ持ち、新産業の創出にも積極的に参画できるスタートアップ人材等の育成が必要である。

・3つ目の視点は、「これからの時代に対応できる学科改善の在り方と少子化に伴う専門高校等の適正な整備」である。少子化に伴う生徒数減少や小規模化により、教育の質の維持が困難になりつつある。生徒や地域のニーズを踏まえた学科やコースの新設・改善であったり、地域や産業界と連携した実践的な学習の充実、また学科間・学校間の連携であったり、相乗効果を生む学びの環境整備、県全体の配置バランスや学校の規模と配置の適正化が求められる。

・これらの3つの視点について、第2回審議会では、「社会の急激な変化に主体的に対応できる専門的資源の能力の育成」、第3回審議会では、「県内産業の発展と新産業の創出に貢献できる能力の育成」、そして第4回審議会では、「これからの時代に対応できる学科改善の在り方と少子化に伴う専門高校等の適正な整備」を御議論いただきたいと考えている。そして、9月に中間まとめをして答申案をまとめていただきたいと考えている。その後、12月と2月の2回で最終案の答申に仕上げていただきたいと考えている。

4 議事1「各専門部会の設置」

○事務局

・各専門部会の設置は、静岡県産業教育審議会会議規則第5条により静岡県産業教育審議会専門部会設置要綱を策定している。それに基づき、5つの専門部会を設置する。

5 議事2「産業全般及び各専門学科等の現状と課題」

○事務局

・本県の産業教育全般及び各専門学科等の現状と課題(農業・水産、工業、商業、家庭・福祉)について資料編に基づき説明した。

(大澤指導監及び各部会担当指導主事)

・資料8、資料9、資料編5ページから21ページについて、本県の高等学校における産業教育の現状と課題や総合学科における職業等に関する教育の取組状況、前回答申の具現化状況を資料により紹介した。

・資料10、資料編22ページから49ページについて、各専門学科等の現状と課題を説明した。

(説明者 農業・水産-平尾指導主事 工業-山口指導主事 商業-片井指導主事 家庭・福祉-朝比奈指導主事)

6 議事3「各委員からの意見、検討事項」

○飯倉委員

・生徒の数が減ってきているとともに、教員の数も減ってきており、教員の負担も増えていると感じている。

・現在、企業研修を一緒に行っている。企業が学校に行き行って講義をすることで、若手の育成につながるというウィンウィンな関係になっている。学校側のリソースもだんだん足りなくなっているため、外部がその部分を担

っていけばよいのではと思っている。専門性のところは皆さんいろいろリンクされていると思うが、それをより一層強化できれば、外部から専門的な講師を呼ぶこともできるのではと考えている。ただし、学校が講師を呼ぶのにかなり手間がかかるため、そのあたりが構築できれば更によいと思う。

- ・生徒がもっと学びを深めるためには、アウトプットして誰かに教えるという作業が大事だと思った。
- ・生徒アンケート調査で、「授業や部活動で学んだ知識や技術を活かして地域住民対象の体験講座等で指導をしたことがありますか」という問いに対して、現在、生徒の5%ぐらいが誰かに教えているという結果だった。その数値を10~15%に伸ばしていくことによって、その学習定着率がアクティブ・ラーニングになると思うので、そのようなことも目指していければ、全体的に底上げになっていき、結果どこに着地すればいいかというのも実現可能性があるのではないかと思った。

○上野委員

- ・静岡県立大学経営情報学部で会計学を教えているため、商業目線での話を期待されているのではないかと考えている。
- ・直近の日本経済新聞(2025年1月19日「増えた大卒、職とミスマッチ」)でも報じられていたが、大学新卒者では、工場勤務などの生産過程・工程の建設で働く人が少ないと言われている。専門高校生も多様なキャリアパスの中で、大学に行くようになっていく。しかし、大学に行ったら、工場現場のブルーカラーの仕事はやらないという偏見もあるのではないかと考えている。そこは、かなり憂慮しているところである。最近の動向としては、スマート・ファクトリーだったり、随分工場のあり方が変わっている。スマート農業は農水省も推しているため、このようなことが1つ鍵になるのではないかと考えている。
- ・データサイエンス・人工知能というと、データサイエンティストというのが、AIと共同して作業を行う時代になっているので、こういったことも教育プログラムの中に含めていく必要がある。その中で、一番重要なところは、結局、専門化せざるを得ない産業教育という現実と、高校側のリソースとのギャップをどのように埋めていくのかということが、一番大きな焦点になる。さっき言ったことは最新の状況の話題になるので、高校側からいうと、絶対無理という意見が出てくるが、世界の動きとのギャップをどのように埋めていくかを考えなければならない。
- ・先ほどの飯倉委員の「深い学び」というのが1つキーワードになると思っている。学校の中でできるのは「深い学び」だと考えると、産学高大連携の中において、「深い学び」をどう実践していくのか。また「深い学び」について、機会があれば話をしたい。このような問題意識で、参画させてもらいたい。

○江頭委員

- ・工業高校の取組で紹介があったが、「マイスター・ハイスクール事業」で、浜松城北工業高校と関わらせていただいて、教員を送っていろいろ取り組んできた。その事業の中での取組も、今後の審議会で紹介していきたい。
- ・今、共通して出てきているのが、DX人材の育成はどの産業分野でも必要である。
- ・日本はどんどん人が減ってきているので、人がやる部分と自動化していかなければならない部分というのは、どの産業でも必要になってきている。ただ、その課題そのものは、やはり私たちは、工場の現場の人間が課題認識して、人間ではない代替手段でどうやっていくのかという産業がやはり中心だと思う。DX人材といっても、なかなか専門知識の高い人。それはひょっとしたら大学に行って学ぶのかもしれない。でも、ロボットはロボットだけでは動かないので、それをどう使っていく、どう保全していく、どうやって広げていく、ということも考えられる人材をもっと作ることによって、人でやる部分とそうではない部分ができるのかなと常々思っている。そのような視点で、また次の世代、日本を支える人材をどう育てていくのかというところで皆さんと協議を進められればと思っている。

○奥田委員

・介護福祉士の養成は高校でも行われている。介護現場では圧倒的に人材不足ということで、どうやって人を入れるかっていうのは課題である。介護現場というのは介護福祉士だけではなく、何の資格もない人も入れざるを得ないという状況で、今、新卒に限らず中高年の方々や退職した方々にも入っていただいている。そのような中で、介護福祉士にしかできない仕事というのがたくさんあるので、たとえ高卒で19歳であっても、介護福祉士という資格を持って入った人たちには職場からの期待が大きい。

・しかし、その一方で、大学を卒業して入ってきた人が、たくさんいる。そういう人たちに対してリーダーとしてどのように仕事をしていくかというのは非常に大きな課題である。リーダーシップの育成ということが、短大、大学を出た介護福祉士でも同様である。高校卒業で入っている若い人材にとって、かなり働きにくい部分は多々あるのではないかと考えている。そういう点で、せっかく高校で介護福祉士を取って入ったのに、すぐやめてしまうということで、これに対して何かサポートができないかっていうことは、介護福祉士の養成をしている高校の先生達からも伺っている。職場が新しい人材をどのように育成していくのか、人材育成のキャリアプログラム、そういったものに対しても、この審議会では何らかのサポートができるような提言ができればと思っている。

○川田委員

・本日高校の先生からいろんなことを御説明いただいて、私の印象としては、非常に上手くやられて、頑張ってもらわれて、生徒さんの満足度も90%を超えているというのは、すごいと感じた。生徒が自分の行きたいところに入学されているというのが非常にすごいというのが正直な印象で、皆さんの御尽力はすごいなと思った。

・最初の飯倉委員の話にもあったが、やはり先生方の負担ということもあるので、今後、外部の方とかいろいろなところで、高校生に企画したりとか、大学もやったりしているが、そういうところとうまく連携して、そういうチャンネルをどんどん広げていくというのは非常によいのではないかと考えた。

・どこの分野の方でも、IoTとかICTであるとかの話が出てきているので、学校間で、例えば商業と工業と一緒になにかをやってみるとか、そういう風な取り組みもいろいろあると、製品を作るだけではなく、そこを経営的にどう考えるのかといった話など、いろいろ見解が出てくるのではないかと考えた。

○岸田委員

・話を聞く限りでは、やはりデジタル化やグローバル化、そしてDX化、そういうものを重ね合わせた複雑化の時代に入っていて、非常に不透明な時代にどのように教育をしていくのかという、そういう話が主だったのかなというように感じている。

・そういう点で、産業界から見ると、先ほど江頭委員からも話があったように、いろんな課題というのは現場にあるというのは当然だという風に思っている。その現場で、いかに疑問を持ってその作業ができるかということが、非常に重要になってくると思っている。そのためにも明るい未来を創造できるような方がいないと、なかなかそういうことができないと思うので、そのためにはどういう人材を育てていくかというように思っている。

・専門高校ですので、専門的知識というのが非常に重要だと思うが、それだけでは実は疑問を持てる人材はなかなか難しいのではないかと。やはり専門的知識プラスアルファのものをいかに育てていくかというのが、我々産業界としては求めたいと思っている。そこさえできれば、技術的な面は当然日々変わるが、産官学や大学との連携とか、そういうところもできてくるのではないかと考えている。そういう点をお願いをしたい。

○齋藤委員

・大学の立場ということもありますので、先ほど上野委員の話もありましたけど、高校と大学の違いは一体何なのかということで、我々が、学生を集める時に、高校卒業と大学卒業では給料が違うということを言ってしまう。

そこに大学としての魅力がある。4年間の違いって何かって言うことだと思いますけども、これはある意味、受け入れていただける企業様側の対応もあるのかと思う。

・その一方で、実は専門高校を出てきた生徒さんについては、知識はやはり持っている。従いまして、我々のところでも、例えば水産に関することをやるが、水産高校を出てきた学生は、「高校でもやりました」「もうわかります」ということでやめてしまう子もいる。そういう意味では、その専門的な知識というのは、実は高校と大学そんなに変わらないのではないかという気がしている。

・我々大学としても、問題発見解決型ということを意識している。先ほどの福祉の説明のところ、福祉人材と高い志という言葉があったが、これはすなわち人間教育ではないかと思う。高校も大学も、その人間教育というところがどれだけできるか、そのプラスアルファで専門的な知識ということに繋がっていくと思う。

・これからますます少子化ということが問題になり、先ほどの教育長の話でも、中学生が減っています。中学生が減ってくということは、その3年後、高校生が減ってく。それはつまり大学に来る学生が減ってしまうということ。これは大きな問題なので、高校とか大学とかではなくて、やはり一緒になって考えていかなければならないと思っている。高校の問題が解決できれば、我々大学としても解決できるのではないかと考えている。ぜひ御一緒に検討して、考えて、我々にも繋がることになっていければと思っている。

○豊田委員

・普段は障害者の就労支援施設で施設長をやっている。主に障害を持った18歳以上の人たちの就労現場でのサポートをしている。なので、福祉の現場であったり、うちの会社は自然栽培といって、農薬・除草剤を使わない農業を行っているところもあり、農業分野のところも少し関連してくるのかなと思っている。

・実際現場にいて、スタッフや若い方を見ていて思うのは、課題を見つけて解決する力というのが結構20代の方が少なく、全部聞いてきたりとか、こちらから指示出ししないと動けない方が多いと感じている。学生時代どういう経験してきたかなと疑問に思うところもある。

・学校の中で総合学習とか専門性の高い学習をしてきたと思うが、現場に行っても実際に動くことができない方が多くて、何が違うんだろうと思った時に、やはり経験だと思った。学校内で体験することも非常に重要だと思うが、外に出て経験する力も身に付けていくと、専門性であったり、考える力であったり、スキルアップしていけるのかなと思った。

・私たちは農業をやっていて、出口というところが非常に苦しんでいて、一般でも農商工連携で製品が出てたり、支援策もいっぱいある。今後、静岡県にはいろんな専門分野があるので、高校の農商工連携みたいなことを、地域とか学校内ではなくて、そこを超えて静岡県全体で農商工連携で、商品開発であったりとか、窓口の政策だったりとか、我々一般企業とかが支援していくような形が取れると、今言っているような色々な課題のところに少し繋がるのではないかと感じた。

○西村委員

・今、転職市場は活況である。現職場では自身の成長が見込めない、あるいは自分を探し転職している。社会に出て実際に仕事してみないと、自分の適性が何なのか、どんな業務に向いているのかわからない。必要な学びは学校だけでなくグローバルで学べる環境がネット上でできている。人生100年時代は、学生から社会人へ、転職や起業、定年後の3ステージ働くと言われている。生徒の指導に尽力されるこの会議場にいらっしゃる方々でさえ、定年退職以降とか60歳以降は、どういうキャリア作っていくのか、考えて準備する必要がある時代になっている。「何のために働くのか」「何のために生きていくのか」といった、思想・哲学的な部分が生徒にとっては大事ではないかと感じている。

・実際社会に出ているような現場を体験してみないと適性はわからない。リアルで人間関係を作るとか、感謝の

気持ちを周囲に持つとか、たとえ失敗しても、何回でも人生というのはチャレンジできるといった思考を、早い段階で身につけてもらいたい。

・各論のところによると、農業関係の取組は素晴らしいと思って聞いていた。ただし、一括りで「農業」といっても生産技術と、ICTとかスマート農業など生産効率を上げていくことと、六次産業化による加工品の企画開発やマーケティング・クリエイティブの部分が混在しそれぞれ違った適正が求められる。様々な体験を通して、自分が好きなこと、夢中になってやれたことは何なのか、自覚できるような教育が必要だ。

○村木委員

・中小企業診断士ベースの民間のコンサルティング会社をやっており、中小企業の支援、それから創業者、スタートアップの支援をやっている。

・そういう中で、どういう人がスタートアップで、どういう人が成功するかを見ていくと、テクニカルな知識やマーケティングの知識はもちろん必要だが、やはり一番大切なのは、なんでその仕事を自分がやるのかということをよく理解して、何度失敗しても繰り返してそれを追求する心みたいな、動機付けの部分がしっかりしている人たちが最終的には成功するのかなという気持ちを持っている。

・今回この資料をいただいた時に、ざっと拝見して、素晴らしい資料だなと思った。しかし、読みながらだんだん苦しくなってくるところがあった。県の側からの期待がすごく大きいのがわかる反面、その当事者はどうなんだろうというように思った。彼らのモチベーション、なぜその専門高校を選んだかということ、多くは満足していると答えているが、本当に彼らその道を選んだ動機というものがクリアになっているのか、深掘りしているのか。あるいは、もっと動機を培っていくというようなことが教育の中でされているのかということ、どうなのかなと少し思ったところがあった。

・教育に満足しているという方たちが100パーセント近くあるというのは、裏を返せば、その課題意識が薄いということかもしれないという気もした。そのため、高校生たちの実態を知ってみたい、本当はどう思っていて、どうしたいのかということを知りたい気持ちがある。

○望月委員

・前回、前々回もこの答申に関わっていた。時代の変化に対応するということではほとんど変わりはなく、前回も、ICTの活用、起業家精神という話も上がる中で、どこまで実現化できたかということも反省しながら、今この場に出席している。ただ、前回と違うのは、よりスピード感が増している。デジタル化は、学校現場では、この5年ぐらいで、加速度的というよりも、驚異的なスピードで進んでいる。タブレットも、子供たちは先生よりも進んでいる。そのような状況の中で、今どうあるべきかということ、企業の皆さんと相談して答申に向けて協議していきたいと思っている。

・学校現場の苦しみというのは、飯倉委員の話にもあったが、その負担感というのはかなり大きい。生徒減に伴う負担感であるとか、教員もそれによって減っていく。また予算面もかなり財政としては厳しい中で、施設・設備も老朽化する。新しいものもなかなか入らない中で、魅力化というところを前面に出しながら専門高校としては取り組んでいる。

・時代にあった教育ということで、一番喫緊で課題なのは、教える先生方の、団塊の世代が抜けた後で、専門性を持っている教員が、本当に少なくなってしまうと、そこが担保しきれない。外部に人材を求めて、企業連携というのも、かなり進んできている。それもだいぶ定着してきているところだが、そこも負担感ではある。しかし、そのような取組や連携が、子供たちをより育成していると感じている。自ら連携を取るために進んで動く子もいるし、教員主体で動く子もいるが、そのようなところで子供たちは魅力を感じているということもひとつある。

・資質・能力の育成というところを、子供たちに身に付けさせるために取り組んでいる。専門性というところだけ

ではなく、資質・能力というところに、最近ポイントを置いていると思っている。

・ある大学では、推薦で入学した農業、工業、商業学科の生徒と、一般入試の子と比較すると、やっぱり推薦入試の子は専門高校なので学力的には少し低いけども、2、3年になるとそういう子たちの方が活動的で、頑張ってくれている。それはなぜなのかということも大学の先生が言うには、実験、実習などに多く取り組むことで、チーム力やコミュニケーション能力が身に付いているのではないかと。段取りなども、実験、実習で大事なところだし、何をやればいいのか自分から仕事を探すということもできているのではないかと。いった話を聞くと、専門高校のあり方というのはそもそも何なのか。普通高校という言い方自体に違和感があり、ある校長先生が、「普通高校の普通って何なのか」と言っていた。「専門高校は普通ではないのかな」という言い方をされると、専門高校という位置付けを上げていく、そういう取り組みも必要なのではないかなと感じている。

○横田委員

・本学は日本で最初の農業の専門職大学ということで、4大と短期大学部を設置している。専門職大学ということで、職業人を育成するということで、大きくかぶるところがあって、まさにうちの大学の課題でもあると思っている。

・特に情報面や施設面は、うちでも喫緊の課題となっているが、県の中にあるということもあり、予算面が厳しいということもある。先ほど高校間でも連携という話をされていたが、県内、もう少し広い目で、連携していただき、うちの大学も含めて、情報というものを考え、ICTの整備を進めていただくということを可能であればやっていただきたい。

・今、GIGAスクールとかいろいろあって、クロームブックやiPadを、中・高校で使っているが、大学に入るとWindowsということで、これも実は喫緊の課題になっている。多分、次の4月に入ってくる学生さんは、クロームブックに慣れている中で、Windowsのパソコンを買わせて、またやらせるということが、学生の経済的な事情もあって、どうしようかと検討しているところである。そういう意味で言うと、縦方向の連携というのも必要であり、これも検討課題に入れていただければと思う。

・農業・水産、商業、工業、家庭・福祉それぞれの見方もあるが、今、農福連携や、一般企業の農業参入などが進められているということで、農業においても工業や商業、他の産業との間の連携も随分出ている。うちの学内でも縦割り構造から抜け出せないところであるが、専門をやりながらも、他の専門との関わり、これを重視していくというのは、何らかの形で取り入れた方がいいのかなと感じた。

・情報と同時に、今、環境とか経営ということも専門を超えて、どの分野でも重視されているところかと思う。これをどうやって取り入れていくのかということも議論できればと思っている。

7 質疑

○村木委員

・現在、各教科で取り組まれていることが、今回提示されている各教科の課題に、現状どこまで課題解決に貢献しているのか、何が足りないのかを教えていただくと、これからの審議の資料の材料になるのではないかなと思った。

○事務局(大澤指導監)

・各教科で紹介したように、いろいろな取組はやっているが、全ての生徒がそのような取組に参加をしているわけではないということが課題だと思っている。何でも積極的に取り組む生徒ばかりではない。イベントの開催時に、同じ生徒が毎回参加するということもよくある。積極的に取り組む生徒を増やすことが課題だと感じている。

・施設・設備の面では、学校でこういうことをやりたいと思った時に、それに対応できるような最新の施設・設備が、学校には備わっていないことも課題だと感じている。

○村木委員

・先ほどのアンケート調査の結果で、「高校入学後、外部（地域、企業、行政、大学等）の方との取組に参加したことがありますか。」という設問に対して、半分ぐらいの生徒しか参加していないということであるが、なぜ参加しないのかということをもし聞くことができれば、これらの取組のどこに障害があるのかという解決の道筋が見つかるのではないかと思った。

○事務局（大澤指導監）

・御紹介したアンケート調査は、本日の第1回審議会の基礎データとして、まず調査をしたものである。これ以上の深掘りしたものは、今後実施をすべきと思っている。

○岸田委員

・（資料編 資料4）検討の視点のア「社会の急激な変化に主体的に対応できる専門的資質・能力の育成」という中の、「教員には最新の知識や技術の習得、地域との連携を深めるコーディネート力等が求められ」という部分について、「教員には最新の知識や技術の習得」は当然であり、お願いしたいことである。しかし、「地域との連携を深めるコーディネート力が求められる」という部分について、当然そういうことも必要であるが、地域との連携を深めていくための基礎的なものは、教員に任せるのではなく、組織として作っていくことが必要ではないかと考える。その上で、細かいところを教員の方はやっていくことはあると思うが、ベースとなることはもう少し上のところでしっかり連携を取っていくということが必要なような気がしている。あまりにも教員の方にいろんなことを押しつけていくと、大変なのではないかと感じた。

○飯倉委員

・先ほど望月委員がお話していたが、民間と学校との連携が最近進んでいると思う。企業も負担感が大きくなってきているところはあると思うが、それはその企業が高校の授業を行っている人間に対して何を求めているかによって多分変わってくると思う。ただの協力なのか、人材育成なのか。授業を行うためには、自分の会社を知らないといけない。そのため若手を導入して、1年目、2年目だと少し厳しいが、3年目など自社だけで研修ができる会社だけではないので、まとまって研修を行うなどの方法がある。実際、自分が知っているところで、農業高校に講師として行きたいという企業がたくさんある。ただ、レギュレーションを入れないとなかなか危ないところもあると思う。例えば、静岡鉄道などの5社研修などは静岡ガス等と連携しており、企業の若手が学校へ行き講義をするというのもあるが、非常に成長してきている。お互いに必要としているもの、マイナスとマイナスを足してプラスにする効果を生み出すことができればと思っている。また高校生がそれを元に、中学生に教えるなど自分より若い子に教えていくというスキームが1つ必要なのかなと思う。

・大学生もそうだと思うが、短期的なものの中長期的なもの、潜在的なもの顕在的なものを分けながら、みんなが困っているところを足していくと、実は解決できることがあるので、そのあたりを探れば良いと思う。

・専門職は、特に企業は専門でやっていることが多いので、専門の方に来ていただいて御講義をいただくということが一つ先生たちの負担も軽減できるのではないかと思う。自分がわからないことを教えるということは大変なことなので、そのあたりの補いを設計していくのは大切なことだと思うし、静岡県の人材を育成するために全部がまとまってやらなければならない問題だと思うので、企業と学校が連携するべきかなと感じた。

○上野委員

・すごく重要な指摘を感じる。その上で重要なのはコーディネーターの存在になる。最近は大学でもそうした依頼を受けることがある。大変すばらしい試みであると理解した上で発言すると、高校側の依頼で出張講義を行った際に、ほとんど内容を丸投げされてきて、当日にならないと学生の雰囲気や状況がわからないとか、直前になって突然いろいろな要求をされたり、などの事案に遭遇する。教員サイドが多忙で調整できないケースもあるように感じる。専門のコーディネーターの必要性を感じる人が多い。

・コーディネーターの必要性についてどこかに盛り込めたらと思っている。

○望月委員

・今いただいた御意見はありがたい。コーディネートをするというのは、教員にとってもかなりハードルも高い。もちろん産業教育も必要であるが、これ以外の外部からのいろいろな〇〇出前講座などの声もあって、毎週何かしらの行事が入っている。そういったことを住み分けているうちに、例えばそういうことに長けている教員のところには二重、三重、四重に仕事に関わってくるので、それをまたコーディネートを校内で誰かにということもなかなか難しい。そのため、県単位というのも難しいとは思いますが、コーディネーター配置みたいなことができればと思う。小学校とか中学校でもコミュニティースクールのコーディネーターをつけたりするので、同じことで、なかなかそれが難しく、それに長けた人がやってもらえるのがありがたいと、現場としては感じている。

○川田委員

・講演会とかそういう時に、講演される方が高校生相手に伝えるので、こういう方になりたいなっていう方がうまく応援してくれると非常にいい効果があるのではないかと考える。

・憧れるというか、夢があるような話というか、こういう人に憧れましたという方が講演されるといいのではないかと思った。

8 閉会

○事務局

・今日いただいた御意見については、事務局の方で整理して、専門部会等で協議し、審議会の方に取り上げていきたいと思っている。

・今後、第2回目の日程は4月中の開催を予定している。また、改めて日程等の御都合について、連絡をさせていただきたい。